

Title	象は鼻がながい：「は」と「が」についての一つの意見
Sub Title	The elephant has a long nose
Author	沢田, 允茂(Sawada, Nobushige)
Publisher	三田哲學會
Publication year	1961
Jtitle	哲學 No.40 (1961. 10) ,p.231- 234
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論評
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000040-0239

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

論 評

象は鼻がながい

—「は」と「が」についての一つの意見—

沢 田 允・茂

「哲学」第37集（1959年12月）のなかの大出晁氏の論文『「は」と「が」について——日本語の論理構造の問題——』は日本語の論理性についてきわめて具体的なすぐれた分析を提出している。この種の分析は国語学者も論理学者も未だかつて真剣にとりくんだことのないものであり、その意義は大いに認めらるべきであろう。この論文の全体の中心概念である「論理的」という概念——より厳密に表現するならば「ある自然言語が論理的である」というときの「論理的」の意味については大出氏もその問題性を指摘しており、従つて言語のもつ論理性というものを最初から定義する不毛性のかわりに“便宜的に「論理性」の基準を……通常の標準的な古典的述語論理という記号論理学の体系におく”（p. 130）という態度で問題を限定している。そして更に日本語の使用のいろいろな側面の中から「は」と「が」を取上げ、これが変項の領域の相互関係および変項の一定性を決定するという役割の中で、果して西欧の言語と比較して明確な規定性をもっているかどうかを中心として考察する。“日本語の論理性を論ずるとき問題となるのも、この変項相互の関係の方なのである、変項が相互にどのように関係しあうか、またある選ばれた変項が一定に保たれているかどうか、どの程度日本語の表現のうちにはつきりとでているかということが、日本語の論理性を判定する基準となるといえる”。（p. 159）そして大出氏は「象は鼻がながい」、「犬は肉が好きだ」などの日本語の例をあげて結局“日本語の普通の文章においては、「は」と「が」はそれによつて導入される変項相互の関係を規定する働きをもたぬこと”を明かにし（p. 157）少くともこの点に於いて日本語はフランス語などよりは「論理的」でない、という結論を導き出している。即ち日本語の場合、論理構造が一義的に言語表現によつて規定されるよりも「よみこみ」、即ち当の文章外の知識の前提のもとに、いはば implicit に規定が行われていると考えられるのである。

しかしこのように「よみこみ」は日本語だけに特に著しいものであろうか。たしかにヨーロッパの言語では語順や格の変化によつて変項の相互関係が明かにされて

象は鼻がながい

いると考えられるが、果してそれらだけで十分に規定されているだろうか。「象は鼻が長い」という文と「鼻は象がながい」という文とは強調点の相違をのぞけば論理構造は同じであり、それが同じであるということは、語順や「は」と「が」の使用では決定されていない。両文とも論理的には同一の構造

(x) (y) (Fx · [Hxy] · Gy ⊃ Jy)

をもっているということは文法の構造には余り反映されていないといえよう。即ち「よみこみ」が必要だということになる。勿論この問題は主語述語の問題と同じではない。「象は鼻がながい」という文の何が主語か、という問題は主語—述語の区分の曖昧さの故にここであえて取上げることを止める。結論的にだけいうならばこの文では「象」と「鼻」とが二つの主語であり、「ながい」は後の主語たる「鼻」の叙述であると考えれば良い。特にこれを英語で “The elephant has a long nose” と表現するときには明かに Hxy として二つの実体（主語）の間になりたつ関係をあらわしており、「ながい」は y を形容するものであることがはつきりしている。問題はこの二つの主語の間関係が文法的に明確に規定されていないということである。この点において大出氏の意見は正しい。しかし大出氏がふれなかつた他の側面、たとえば形容詞や副詞の場合には英語の表現には日本語には必要のない「よみこみ」を必要とするような表現が多い。例えば、

- 1) “We enjoyed a nice cup of tea.”
- 2) “He throws a pretty dart.”
- 3) “He drives a long ball.”

などの例では 1) に於いては nice は tea にかかるべきものであり 2) と 3) に於いては pretty と long とは dart や ball にかかるのではなくて、意味上は adverb として throw や drive にかかるべきものであり、これは「よみこみ」によつて我々が理解している所のものなのである (G.H. Vallins の “Good English” 47 p. よりの例)。日本語では、

- 2.1) “彼は槍をみごとになげる”
- 2.2) “彼はみごとな槍をなげる”

とでは語順その他によつてそれぞれの異なつた論理構造を明示しており、2.2) のように書いて「よみこみ」によつて 2.1) と同一の論理構造をもつものだと解釈する必要はない。紙数の都合で他の例をいちいちあげることは出来ないが、形容詞や副詞の場合では英語などでもある。場合には日本語以上の「よみこみ」を必要とするということは否定出来ない。

しかし他面において「は」と「が」は何等の決定力をもつていないだろうか。「象は鼻がながい」という文をきいて我々が理解することは、先づ「象」を無数の話題の世界から選び出し、次ぎは象の中から第二の主題として「鼻」を選び、この鼻に

ついてそれが「ながい」ということを叙述することである。「鼻は象がながい」というときには先づ「鼻」が第一の主題として選び出され、次いで多くのものの中から特に「象」が第二の主題として限定され、第一と第二で限定されたような「鼻」について「ながい」ということがいわれる。たしかに「鼻」と「象」との関係が「象が鼻をもつ」“Hxy”という関係であることは日本語の場合は、前提された知識による「よみこみ」であろう。たしかに英語のような場合には、文の中に明白にして（例えば *The elephant has a long nose.*）いる。しかし日本語に於いてあらわされていた話題の強調点の差異を表わそうとするならば「鼻は象がながい」は英語では“Speaking of the nose, the elephant has a long one.”というような表現で新たな句 (*Speaking of the nose*) をつけ加えねばならない。即ち話題の強調点を単純に明確に表わそうとすることから見れば日本語はこの点で英語よりも単純性 *Simplicity* をたもちながら比較的明確な規定性をもっているといえるだろう。別なことばでいうならば「は」と「が」についても、変項領域の相互関係という面では一義的な規定性をもっていないが、しかし話題選択の順序とか、どのような問いに対する答であるかを区別するという点においてはある種の一義的な規定性——即ち「は」と「が」によつて規定されている二つの主語の場合には、「は」はいつも「が」に先立ち、話題の選択の順序をしめしているという一義性——をもっていると思われる。

私が指摘したのは、

- I) 「は」と「が」のような場合には、たしかに変項領域の相互関係については何等の決定性をもっていないが、しかし変項領域の相互関係以外の言語的状況のある要素に対しては決定性をもっているということ、および
- II) 「は」と「が」以外の文法の表現をとつてみるならば、日本語のみが「よみこみ」を必要とするとはかぎらない。

ということである。

I) の場合に於いて「論理性」とは変項領域の相互関係の一義性のみをさしているのかどうか問題となろう。変項領域の決定（いはばセマンティカルな側面）も日常言語にとつては最も重要な要素であり、情報的行為の基礎的なファクターである。この側面におけるカテゴリーの正確さとち密さおよびその一義性もまた「論理的」といつてはいけないものなのだろうか。このような論理性はたしかに現在の形式論理の論理性とは異なるであろうが「論理的」という語の意味はこのようなセマンティカル及びその他のプラグマティカルな面における（たとえば主題の強調の順序などのような）正確さ、厳密さ、単一さなどの要求をもふくんでいると考えることは不都合だろうか。これらのものは論理そのものではなくて論理の規整原理、或いはカント的表現をするならば論理の理念^{イデー}であり、論理外のものであると主張する人もあるだろう。しかしこれらのものが論理学の理念であるという、まさにそのこ

とから逆にこれらの性質もまた論理的であるといえないだろうか。

II) に関しては、「よみこみ」ということが言語行動の不完全性を意味するものではなくて、むしろ言語の *simplicity* をたもつための必要条件である、という点があげられる。特に日常言語は第一義的に経験的情報の獲得を目的とする以上、経験的事物のもつ無限の側面 (F. Waismann のいう *open texture*) をその都度ごとに言語の *occurrence* の中に表現することは *communication* という点から不可能である。この意味において「よみこみ」は無用な言語行為を省略するという合目的な意義をもっている。それには日常言語の目的に対する合理的な——そしてその意味において論理的な手段であろう。

要するに我々の日常言語は生物としての我々の一つの行動であり、この行動を支配する諸規則は例えば *syntactical*, *semantical*, *pragmatical* な諸要素に分けて考察することは必要であるが、同時にそのものとして有機的に一つであるこの行動を把握するために、これらの区別を出来るだけちぢめて、全体としての働きを規整する規則を見出すことも大切である。言語の論理性ということの意味を *syntactical* な側面に限定しないで *semantical* な及び *pragmatical* な側面にも拡大していくことが将来の課題の一つではなからうか。このような意味での言語の論理性はそれではどのようなものであるか、という問いに対して私は卒直に私はまだそれを具体的に云うことは出来ないと答える以外にない。ただ次ぎのことだけは殆んど確信をもつて答えることが出来る。即ち、もしこのような意味の論理性について語るならば、多少の例外（例えば極度に原始的な言語）をみとめるならば、一つの言語が他の言語よりも論理的であるかどうか、という問題は、日本人と英国人とはどちらが頭がいいか、という問題と同じくらい意義のない問題であろうということである。真の問題は、日本人も英国人ともにそれぞれの仕方で頭がいいのだから、例えば日本人がどのような意味で頭がいいかをはつきりさせることではないだろうか。大出氏の論文が、このような意味での日本語の論理性を探求してゆくための一つの礎石であることを私は確信している。しかし同時にこのことが可能であるためには「論理的」とか「論理性」という語の意味に対する懐疑と、より大胆な意味の拡張への意図が必要ではないかと考えるのである。(1961. 7)